

あけゆく空の

兵庫県立尼崎高等学校 40周年記念誌

「あけゆく空の」1963年(昭和38年)5月発行

このファイルを見つけ 青春時代を思い起こして

2021. 1. 16. 探録 65 県立PT会(昭和37年3月3日)

63年 兵庫県立尼崎高等学校 40周年記念誌

祝いのことば

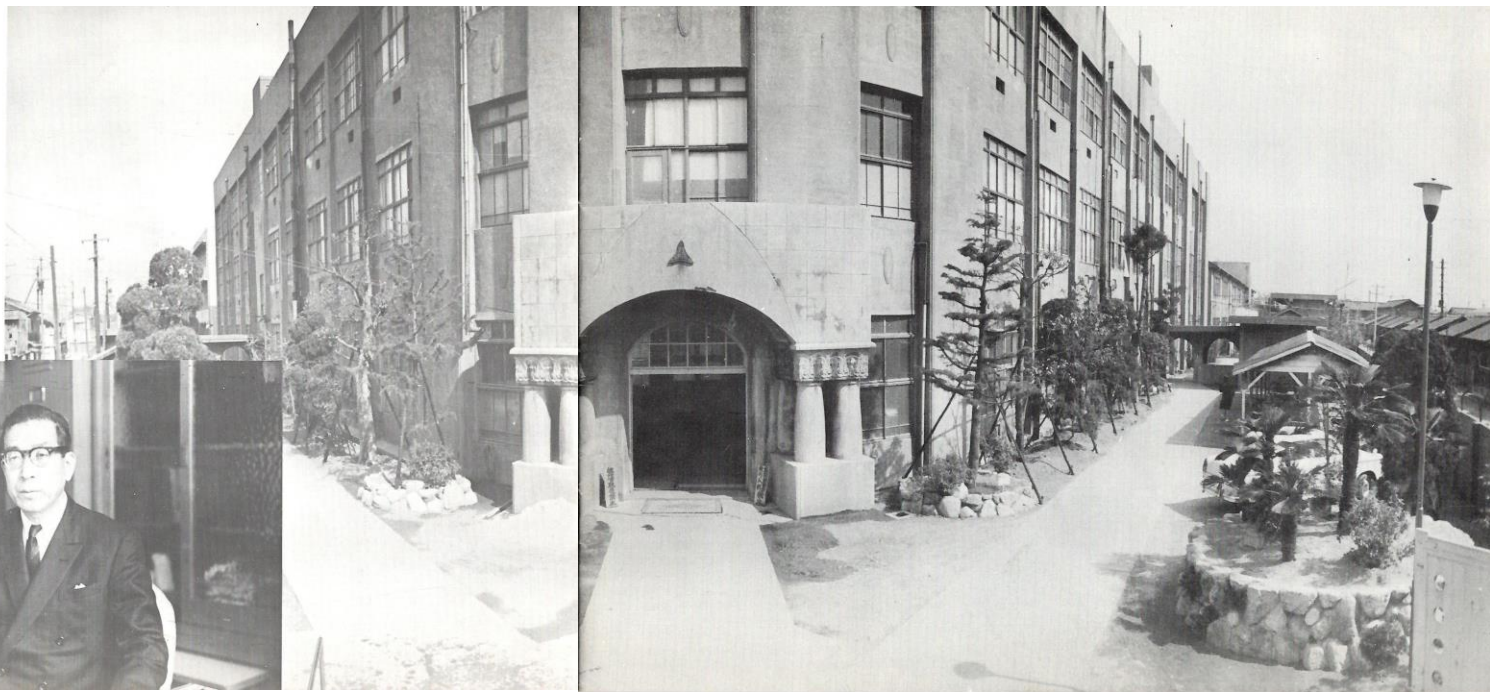
反省は躍進への第一歩である。本校40年の足跡を回顧することは決して無駄ではなからう。むしろ今こそ栄ある歴史と伝統に思いをいたし先輩の培われた尼中進尼精神を知るのみでなく、明日への発展の契機となすべきであろう。阪神間屈指の名門と言われるが、果してその名に値するであろうか。我々教員生徒一同は、負荷された責任の重大性を認識し、一層協力一致の体制を固め、世の期待に答えねばならないと思う。

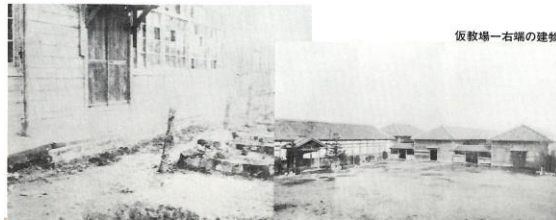
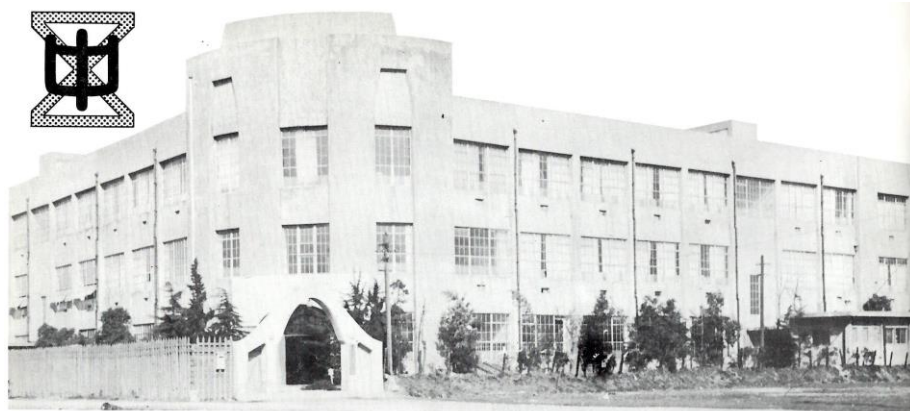
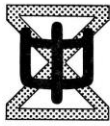
今は昔、私は尼中初代校長の吉野先生から就任の懇請を受けたことがあるが、今校長として40周年式典を迎えるにあたり、その因縁の浅からざるものを銘々と痛感する次第である。

賀美剛健の創立当時の綱領は、40年という年月を通して今も尚厳々として生きている。願わくは未来を反照して、一段の榮光が本校に輝やく日の永劫につづかんことを。

1963年5月5日

兵庫県立尼崎高等学校校長 川崎 操

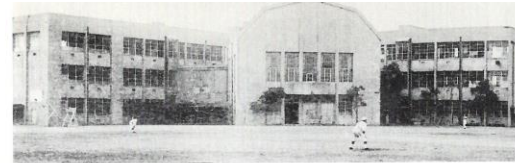




仮教場一右側の建物

尼崎市民持望の中学校が誕生した。大正12年のことである。大正5年尼崎に市制がひかれた時以来の願いが実をむすんだのだといってもよいだろう。なにしろ、当時尼崎には伊丹市に公立中学校があったというのだから、どんなにその誕生が熱望され期待されたかうかがえよう。

第1回生の募集は3月末に締切られたが、150名の定員に518名の志願者が集まり、尼崎高等女学校(現市立尼崎高)の作法室で入学試験が行われた。3月18日に文部省から認可の通知があったばかりのこととて入るべき校舎は間におらず、北城内の旧市役所(当時の尋常高等小学校)の一隅を借り受けて授業が始まった。初代校長吉野平藏氏の着任は9月1日(免令は8月17日)のこ



綱領
質實剛健
忠信篤敬
自律創造



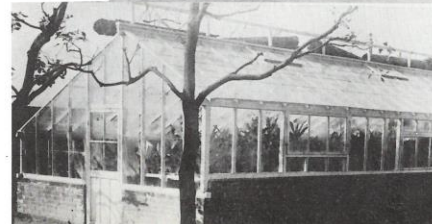
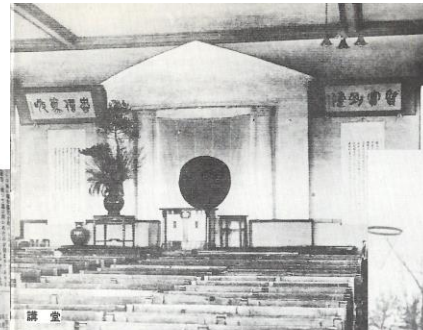
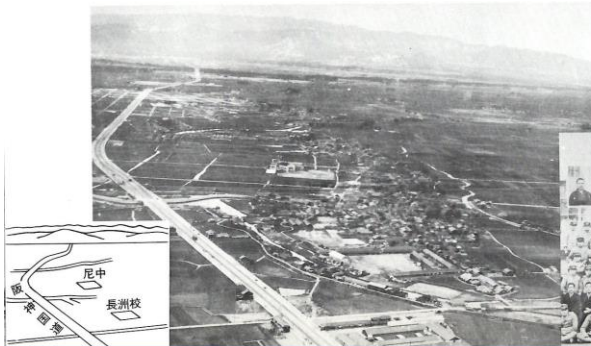
オとてこの日関東大震災起り、世情騒然—それまでは、当時の尼崎高女の校長克用宗太郎氏がすべてを代行された。人物者克川氏の熱意を入れて着任された漢学者吉野氏は、神戸一中教師として県教育界に名の通った人物であった。この二氏によってつくりだされたものが「尼中」のスクールカラーがどんなものであったかは、綱領や校歌あるいは服装などにしのぶことができる。現在地に移転したのは翌年の大正13年5月6日のことである。

校歌
作詞 吉野平藏
作曲 吉野平藏
1 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |
1 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |
2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |
3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |
4 5 6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |
5 6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |
6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |
7 6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |
8 7 6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |
9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |
10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 | 1 2 3 4 5 6 5 4 3 2 1 0 |



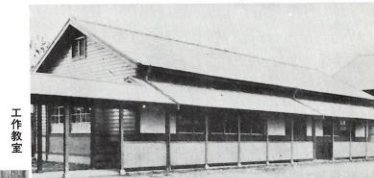
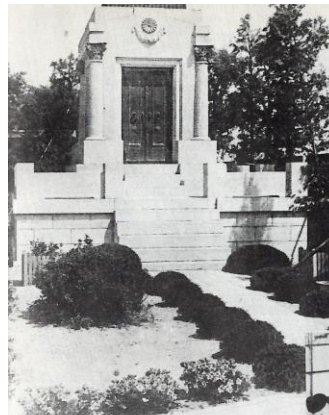
昭和2年、定員750名の「尼中」はここに全学年をそろえて完全な姿をととのえ、西の「一中」(現神戸高校)東の「尾中」と呼ばれる存在となった。時あたかも阪神国道が開通した年のことである。この年を期して校友会が発足し、校友会誌が発行された。創刊号に克川氏が「尼中誕生の裏面史」とでもいふべき「設校資料」を示している。それによると、学校設立の立役者は当時の市長上村盛治氏であることと、市民の願いがいかに強かったかを知ることができる。写真のチラシは、基金集めに演じた紳士制の番組で、役員には市長や市会議長の名もあるし、一般からの寄付金もつきつきと寄せられたそうである。現在なお校舎正面入り口の壁面には、尼中創設の由来と寄付総額24万7321円93銭の明細と寄付者649名の姓名の形られた銅板がかかっている。

「昭和5年前に夢に見た「尼中」が今は雄たる実在として我々の眼前に活躍しつつある。私共は空想の世界から現実の世界へ進化する「尼中」を見た。而して此の現実の存在が絶えず理想的に向上しつつあることを見るのは喜びに堪えない……」と克川氏は結び近くに述べておられるが、学校づくりの盛んな今日では味わえない純粋なよろこびの表現であろう。初の卒業式は、昭和3年3月6日に行われた。





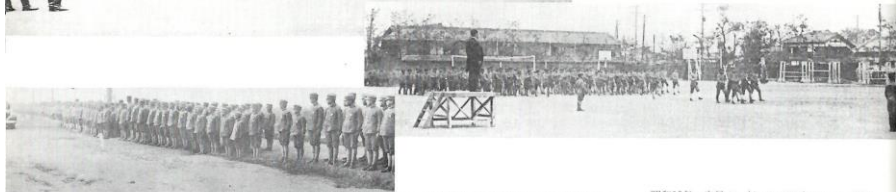
昭和8年、創立10周年記念祝賀の大典が盛大に行われた。その10年の間には「市立尼中」は「市立尼中」となり（昭和5年）校長も第2代の公江喜市郎氏（現武庫川女子大学長）に代っている。記念事業として、この年発足したばかりの同窓会は御真影奉安殿を寄付した。この奉安殿は終戦の頃まで校門横にあって、登下校する職員生徒のメ



工作教室



メ驚き敬礼を受けて越っていた。
この頃、第一種生、第二種生の制度が生まれ、職業教育も遂次行われ作楽科として園芸や工作などの教育も行われた。写真の工作教室が完成し（現在新館のある位置）、全校生徒がカンナノコギリを扱ったのは、もう少し後の昭和12年頃のことである。



昭和10年、定員が一気に1,250名となり、阪神間の強校として、名実ともに輝いていた。
大校における戦雲があただくなるにつれ、学校における教育も軍事色が加わり、毎週一回ラッパ隊の吹奏にあわせてくりひろげられる「聞兵分列」の見事さは全国的にも有名となり、特に優秀校として、皇族宮殿下の御視閲を仰ぐこともあった。写真は昭和11年を、校門前道路に並んでの第四宮殿下出遊への風景（左下）と、15年李王殿下を迎えて（右上）の盛岡風景などをまじえての各種訓練の風景である。
この頃の尼中名物は聞兵分列のほかに、ラッパ隊と奏精古があったが「独自の研究」が全校生徒に毎夏休課されていたことも挙げられよう。その成果は校友会誌「尼中」その他に掲載され、B Kから搬送されたりした。当時の運動部の花形は体操部と射撃部で、明治神宮体育大会に優勝したことも記しておこう。



連合演習



運動会



ラッパ隊





荒川校長事務取扱



初代 吉野校長



2代 公江校長



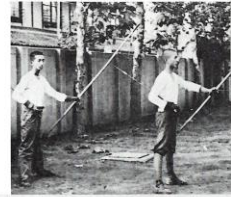
3代 山田校長



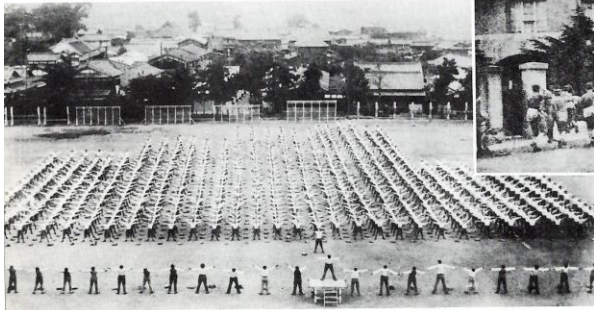
4代 晴山校長



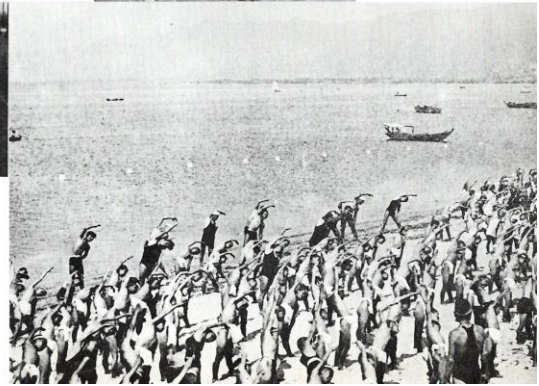
5代 中井校長



手振り

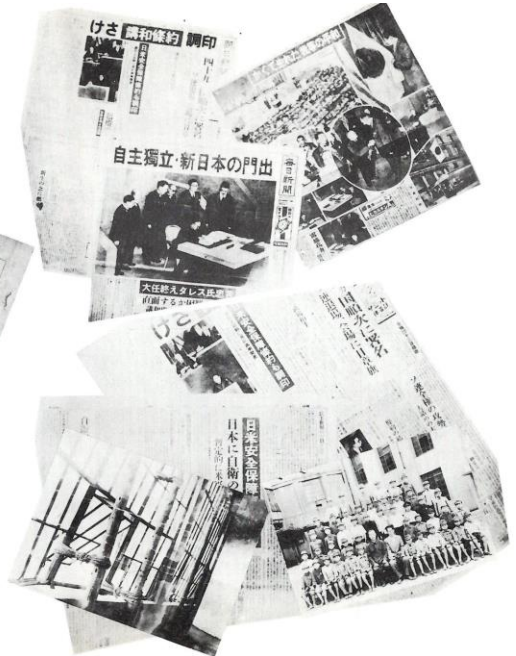


尼中文庫

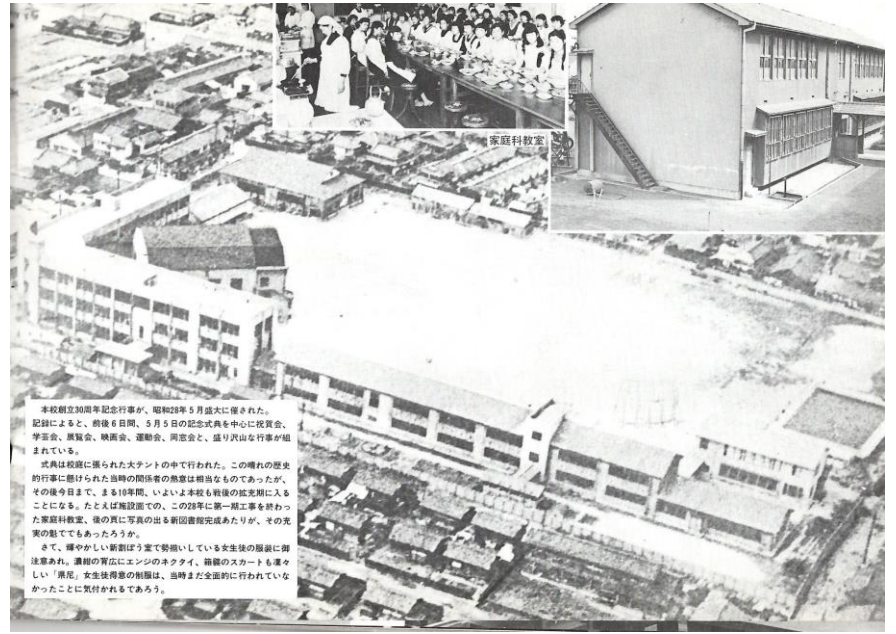
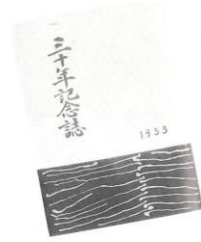


第3代山田校長、第4代晴山校長らが去って第5代校長に中井修一氏が兼任された昭和15年頃は、もはや日本本土は軍国調一色に染まりつつあった。校友会は廃止されて報国団が結成され、個人の人間練成よりも、国家のために役立つ人間の練成が優先し、その方向にすべてが要請された。
昭和2年に創設された「尼中文庫」は3階中央廊に移されて、尼中の文化の灯火であったが、皇戸台風の被害を受け

び農家の手伝いに勤労奉仕隊として動員されるうちはまだよかったが、戦争が苛烈の度を加えるとともに授業が少なくなり、生徒勤労隊として工場への出勤が命ぜられた後の校庭は、或いは耕やされて畑となり、或いは掘り返されて防弾壕となった。19年秋、軍隊の仮宿舎となるに見えて、まさに学校は総動員の一環をたどり、戦争末期の様相は本校にも顕著して明かしているものではなかったことは否めない事実であった。



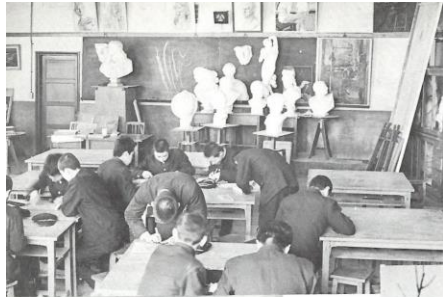
戦後によって、日本は新しい運命を歩むことになった。わが尼崎市にしても、本校の西方一部、枕崎、東本町など広大な地域が焼失し、この惨憺な戦災の痛手がそう容易に回復される筈もなかった。本校また、日本本土の学校がそうであったごとく、新しい教育の立ち向かうところに、苦しみ、悩む時期が暫く続く。
今日の、美術室にまがう豪華な教科書に比較して、昭和21、22年ころの教科書の、何ともいらしい質素さよ。因みに写真の「中華国語 三」は、前者であるが、価格50銭、買値は教科書とも値が4割ほど落ちない。
下の写真左は、21年校長後の入学生のカラス写真と、荒廃した校舎内の一瞥のそれである。戦後直後の惨憺な状況が手に取るようである。
——かくて、戦後も幾度月、21年新憲法公布に始まって、26年には講和条約調印、わが国は激動する世界の潮流の長つ理中を生かぬく努力をひたすら続ける。その間、23年には学制改革が行われ、本校も兵庫県立尾崎高等学校と校名を変更、その名もなつかしい「尼中」の略称も自然発露的解消を遂げることになる。



本校創立30周年記念行事が、昭和28年5月盛大に催された。記録によると、前後6日間、5月5日の記念式典を中心に祝賀会、学芸会、演習会、映画会、運動会、同窓会と、盛り沢山の行事が組まれている。

式典は校庭に張られた大テントの中で行われた。この時代の歴史的行事に懸けられた当時の関係者の熱意は相当なものであったが、その後今日まで、まる10年間で、いよいよ本校も戦後の拡充期に入ることになる。たとえば施設面での、この28年に第一期工事を終った家庭科教室、後の共に写真の出る新図書館完成あたりが、その光栄の點でもあったろうか。

さて、輝やかな新しい新顔はうきうきと整頓している女生徒の服装に注意され。講師の育広にエンジンのネクタイ、飾籠のスカートも遅々しい「黒尻」女生徒得意の制服は、当時また全面的に行われていなかったことに気付かれるであろう。



6代 伊藤校長



7代 田中校長



8代 渡辺校長



旧図書館



第6代校長伊藤八郎氏、7代田中二郎氏、8代渡辺南氏と、功績を残して前校長が解任すると、抱負を抱いて新校長が来任される。——現川崎校長まで、この10年間学校内外に種々の変化発展は見られるもの、はば着いた世の中の中では、学校での生活そのものは、或いは日々是れなりといったようなものでもあったろうか。

写真に見るように、連年連日、学校では各教科の授業が地味に熱心に進められて行く。何といっても、学校生活で一番大事なものは学習だ。そして、その真髓が生徒と教師の呼吸がピッタリと合った授業であることは論をまつまい。

新しい図書館での生徒の自習も順調に育ってゆく。



現図書館



根性を秘めた、はつらつたる生徒群像



校外編。

阪神国道線電停「尼中前」の呼称は、戦後も長くそのままだったが、「尼崎商工会議所前（略して「会議所前」の名で呼ばれていたようだ）」に変わり、また現在の「尼高前」に落着いてまだ2年とは経ってしまい、ところで、余談だが、本校の世間で略称は「尼高」だろうか、それとも「根尼」だろうか。一説には大正昭和30年頃までは「尼高」で、その後「根尼」となったようだと思われる。いずれにせよ、生徒たちは交通地獄の中を毎朝登校してくる。歩いて、自転車にまたがって、また電車やバスに乗って。大都会尼崎市の高校生ともなれば、新設のシグナルの明滅にも敏感で、正確だ。

下校



職員室

生徒会投票

つぎは、校内編。
 まず堅いところで、生徒会の役員選挙風景。25年は初代の執行委員が男子2名女子2名の自然の配分で選ばれて以来、その後年間2期制に変わって、現在にまでこの役員選挙は生徒会の重要な年行事として続いている。生徒の表情は真摯そのものである。扇形の6冊は、生徒会誌「琴柱」(ことじ)である。32年創刊以来、クラブ活動の紹介などを含めて、戦前の校友会誌「尼中」の伝承を継ぎつつ、内容も漸く落着いてきたようだ。
 戦後といえば、ガラリと変化したものに職員室風景があらう。そのかみの、厳めしくも寄りつき難かった職員室しか知らない戦前派の人々は、今日のその和やかな空気と風景は想像を絶するものがあると思う。食堂兼生徒ホールでの生徒同志の談笑も、いまでは平々り寂についてきたようである。

食堂

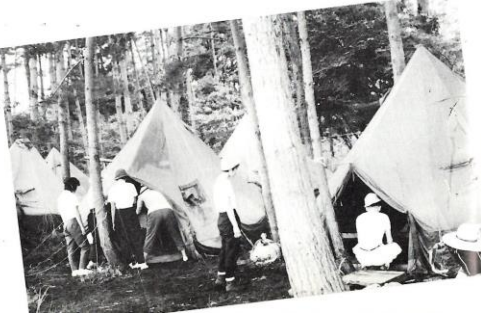


マラソン

野野キャン

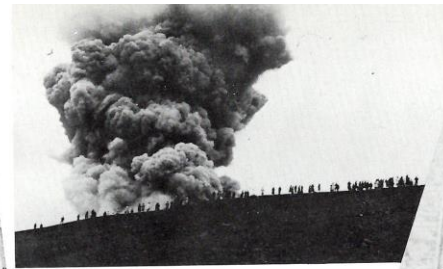


野山キャン



校門を女生徒の群がせおし気になり出てゆく。マラソンの出来なのだ。足中時代の6マイル競争の流れを決む。この体育行事は、なかなか面白いものだったが、最近本校周囲の交通事情の悪化で中止になっているのは残念である。

その代りの学生本道で行われる甲山方面への徒歩遠足もその一つだが、ここ数年で、いわゆる「野外活動」が本校でも非常に盛んになり、写真に見る1年中全員の野山キャン、有志の夏期休暇野山キャンのほか、冬季の信州スキー合宿訓練、スケート教室などの見るべき成果を挙げている野外の諸行事も、新しく本校生の大好きな楽しみの一つとなりつつあるといえよう。



戦後、修学旅行が復活したのは本校では25年である。以来、旅先こそ東京・日光方面、九州方面、あるいは九州へも足を伸ばして南九州までもと、年毎に赤い変化はあつて、生徒たちは春秋の遠足にも用いて、やはり在学中最大の期待の行事として実施され続けてきた。

ちかこつ修学旅行についての論議が盛んで、改廃の声も一段と高いようなら、写真の生徒たちののろしく遙かな表情を見ていると、異郷の背景とあいまつて、何やらなつかしい旅情が浮かび上ってくるようでもある。

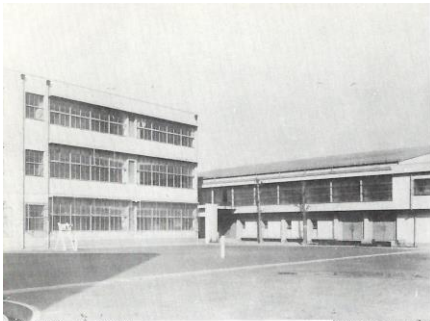


体育行事、文化行事はもとより不断のものだが、いかにその志となるものに例年の体育祭、文化祭の生徒会行事がある。体育祭における各運動部のデモンストレーション行進の人氣は圧倒的なものがあるが、——平常その活動が全く地味なだけ、船と目立つこともない、文化部クラブの目玉の研鑽の余韻が内外に紹介されるのは、それこそこの文化祭という機会を除いては先ず少ないのではなからうか。

体育祭、文化祭とも益々盛大に行って行つてはしまふのだ。

さて、校長室の戸欄に各種優勝旗や優勝旗がズラリ並んでいる晴れがましい光景は、本校の盛んなクラブ活動を示すささやかな側面といふやうか。





左・新館 右・体育館

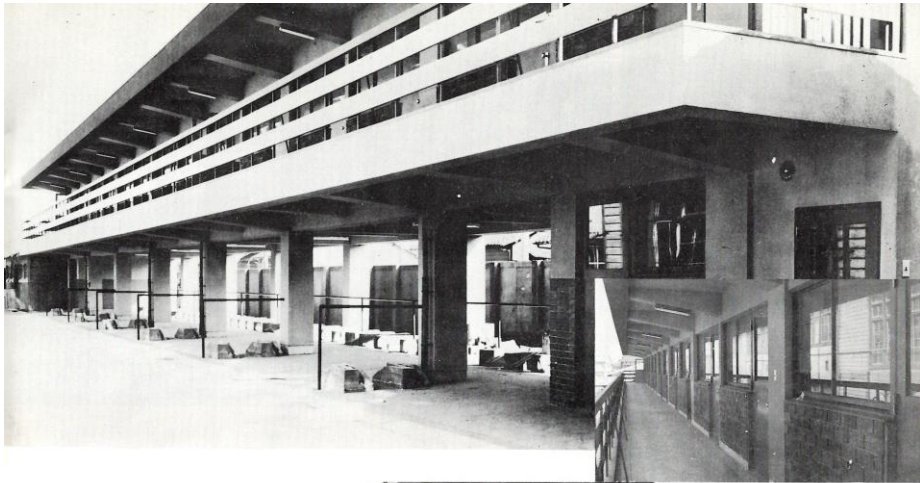


図書館から見下ろす、校庭の片隅の小さな池の邊に新しい季節の色がある。やがて池畔の雪柳が真白い花を咲かせるだろう。

昭和34年5月、鉄筋田舎に北抜してうす緑色の新館校舎が竣工、続いて36年4月には待望の新体育館が落成。その体育館開きに小野選手以下のオリンピック英福体操選手を招き、その素晴らしい演技に接したことはまだ記憶に新しいところである。



体育館内部

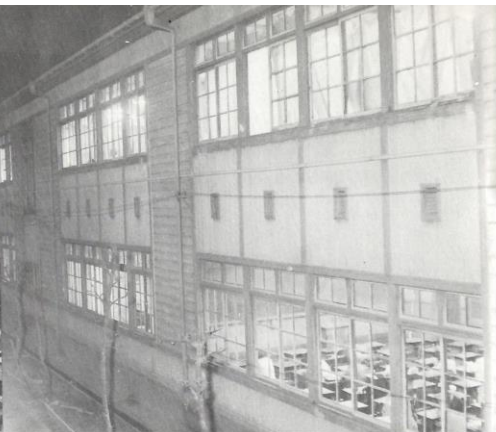


2階部室

また、今春には、多年懸念の文化図書部室が、本造校舎南側に、階下の空間を自転車置場に当て、二階建の講義室まで完成した。施設面でも年を追うてますます充実してゆく本校である。



自転車置場



卒業式

送りだし



テーブル・マナー

全日制の卒業期のあわださは、また格別だ。進学志望の生徒たちは、最後の五分間の努力に余念がない。一方、就職する者は社会見学、テーブルマナーの講習等々、結構忙しい日常を重ねつつ、晴れの卒業証書授与式を待つのである。

昭和3年3月6日、尾中第1回卒業式が挙行されて以来、今年2月25日の通算36回生まで、本校の卒業式は毎春連綿として行われ続けてきたわけだ。

3カ月の曇雪の功成って、めいめい卒業証書を手に、本校の今や名物行事の一つとなった「送り出し」の拍手の波の間を、男女卒業生はそくばくの思いを胸に校門を立ち去ってゆく。父兄と、教師たちの祝福と惜別の拍手が、いつまでもやまない……。



本誌の巻末の小校史に見られるように、本校に定時制課程が併置されたのは、昭和24年1月のことである。産業都市尼崎の勤労青年のため、進んで高校教育の門戸を開いて15年、その間に果たした役割の大きさが窺みられるにつけ、今後一層の充実が期待されることだ。

写真は、景光灯のもと服装もまらまちの定時制ならではの授業風景。黒板のあたり立錫の余地もない討論会。市内定時制高校合同文化祭プログラム。そして、今夜も教室の灯下で勉強にいそむ生徒の姿が窓越しに見える本造校舎の夜間光景。いずれも、心して見てほしいものばかりだ。

本校のある旧校長が「定時制の卒業式くらい涙ぐましいものはない」といわれる言葉が忘れられない。これは決して感傷でなく、生徒諸君の克己の在学4年間に對する感動と親類の涙なのだと信ずる。

